

老舗旅館から蓬萊閣ホテルへ、その後の移り変わり



**蓬萊閣ホテルが建つ前の
成田山門前の旅館**
右から海老屋・小川屋・阿波屋・佐野屋・魚田丸の旅館。
写真は1915(大正4)年。
(『目で見る 成田・印西・白井・富里・印旛の100年』)



蓬萊閣ホテル
1926(大正15)年3月創立、
1927(昭和2)年元旦開業。ホ
テルの存続期間は昭和16~
17年頃である。
写真は1941(昭和16)年。
(『目で見る 成田・印西・白井・富里・印旛の100年』)



成田赤十字病院
1948(昭和23)年2月1日、
成田赤十字病院として開設。
写真は1949(昭和24)年。
(『成田の歴史アルバム』)



成田山第一信徒会館
成田赤十字病院は1954(昭
和29)年5月飯田町に移転。
跡地は成田山第一信徒会館
として改築された。
(成田山霊光館提供)

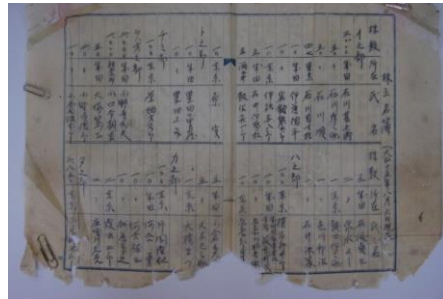


広場
成田山第一信徒会館は、
2004(平成16)年、総門建立に
伴い取り壊され、現在は広場
となっている。

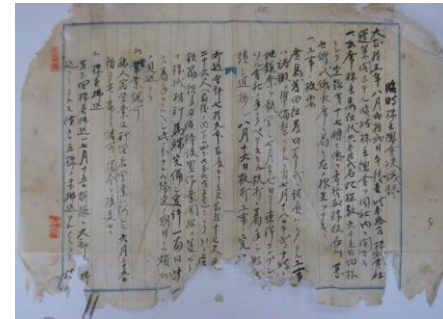
蓬萊閣ホテル創設にかかわる資料



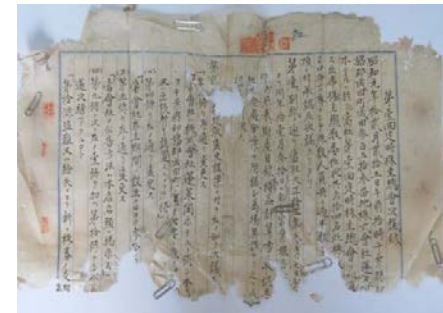
蓬萊閣ホテルのラベル
底辺13.4cm、等辺10.7cm、
高さ8.3cmの二等辺三角形。
外枠にホテル名・場所・電話番号。
内側の左には1858(安政5)年建
立の本堂(現釈迦堂)、右奥には
1712(正徳2)年建立の三重塔が
描かれている。(三枝浩氏寄贈)



株主名簿
1926(大正15)年8月6日時点
の株主名簿。株主総数89名、
うち成田の株主は50名、総株
数1万5千株。石川甚兵衛(海
老屋)3千株、小野寺武夫(小川
屋)2千株と見える。
(成田山霊光館所蔵)



臨時株主総会決議録
(大正15年8月22日)
専務取締役石川甚兵衛(石川
愛一郎)が議長となり、ホテル
の建設工事(広島県藤田組)の
概要を含む4件の報告事項等が
記されている。
(成田山霊光館所蔵)



第1回定時株主総会決議録
(昭和元年12月25日)
専務取締役石川甚兵衛(石川
愛一郎)が議長となり、会社創
立後11月30日までの営業報告
と、定款に定められた内容の8
項目の変更が承認されている。
(成田山霊光館所蔵)

史料の詳細は、『成田市史研究』38号をご覧ください

平成26年度 市史展示
会期 平成26年7月~8月28日
会場 成田市立図書館 2階展示コーナー

成田で最初のホテル

蓬萊閣ホテルと石川家(海老屋)



1938(昭和13)年
成田山一千年祭
で賑わうホテル
(『ふるさとの想
い出写真集明治
大正昭和成田』)

今から88年前、現在の成田山新勝寺の総門前に、成田で最初の近代的な「蓬萊閣ホテル」が設立した。1926(大正15)年3月、当時の成田町成田353番地に、門前の海老屋・阿波屋・小川屋の三つの旅館が合同で株式会社を組織し設立したホテルです。鉄筋コンクリート3階建て、客室30数室、千人風呂や家族風呂、宿泊客だけでなく参詣客も利用できる大食堂、舞台付きの大広間などを備えたホテルであった。

ホテルの設計者は、新聞によれば内山工学博士とある。また、ホテル工事を請け負った会社は、広島県の藤田組(現在の(株)フジタ)で、大正15年6月より工事を着工し、昭和元年12月31日に完成し、1927(昭和2)年1月1日にホテルが開業した。

ホテルの創設に尽力した石川愛一郎

(十代目石川甚兵衛)



1873(明治6)年1月10日生まれ、1938(昭和13)年4月16日死去。
慶應義塾大学卒業後、横浜興信銀行(横浜銀行)に勤務、1900(明治33)年帰郷し、実家の海老屋旅館を継ぐ。
1926(大正15)年成田で初の蓬萊閣ホテルの創設に奔走し、専務取締役として活躍する。
新勝寺の石川照勤の信頼を受け、成田山の教育事業(幼稚園・女学校・中学校)や成人教育機関新更会の発展に尽くした。

海老屋旅館

○『千葉県博覧図』

1887(明治20)年の下総、上総、安房の各郡町村における資産家、豪農、医家、社寺、学校、工場などの邸宅、建造物400余点を収載する銅版画集成で、それぞれに解説が付されている。この集成図の中に、蓬萊閣ホテルの創立に関わった3軒の旅館のうち、海老屋旅館(石川甚兵衛)と小川屋旅館(小野寺久太郎)の銅版画が掲載されている。



『千葉県博覧図』によれば、海老屋甚兵衛の名の初出は、「1706(宝永3)年で、成田でも商家として古い創業とある。歴代甚兵衛を世襲し、明治時代の甚兵衛(九代目甚兵衛・石川正英)は成田町長・県会議員として活躍し、大正・昭和初期の甚兵衛(十代目甚兵衛・石川愛一郎)は三橋金太郎町長と共に、成田山経営の成田中学校、成田高等女学校等の教育事業の理事として尽くし、愛一郎の子・順は毎日新聞北京支局長を経て、終戦後の混乱期に成田町長となり、教育改革、食糧不足、特に新制中学校設置等の困難な処理に尽くした」と記されている。

(.....は訂正・加筆)

○仮名垣魯文の『成田道中膝栗毛』



(成田市立図書館蔵)



仮名垣魯文は、江戸末期から明治時代にかけての代表的な戯作者。1856(安政3)年、弥次郎兵衛・喜多八の二人を主人公として江戸から成田までの道中記を、鈍亭魯文の名で書いた。この中で、成田山新勝寺門前にあった「海老屋」旅館が描かれている。

海老屋味噌醤油醸造所



初代石川虎之助

八代目石川甚兵衛が安政年間の頃に始めた商売で、1878(明治11)年9月10日に長男虎之助に分家させ継がせた店である。醸造所は昭和30年頃まで営業されていたが、時代の変遷とともに廃業となり、現在はドライブイン海老屋となっている。1884(明治17)年に土浦の豪商岡本儀兵衛の娘のふでを嫁に迎えた。蓬萊閣ホテル創立の発起人7人の内の一人である。

石川隆氏は、「初代虎之助は中々の男振りで、当時海老屋旅館を常宿としていた歌舞伎の五代目尾上菊五郎の養子に迎えたいと懇願された」エピソードを伝え聞いているという。



左：一番奥が醤油蔵、中程が店、手前の2階建は西洋館。昭和7~8年頃



上：醸造所で働く人々、昭和初期



印半纏(しるしばんてん)

八代目甚兵衛(1830(天保元)年~1884(明治17)年5月)が自らデザインし着用していたと思われる革製の特注印半纏。襟には土に一(甚兵衛の紋)と甚兵衛の甚の2文字が縦に記されている。前~後身頃には石川家の家紋である「笹竜胆(ささりんどう)」を粹に意匠し、背中には海老屋の海を丸で囲んでいる。



味噌・醤油のラベル

ラベルの真ん中には○の中に目を測る「分銅」が意匠され、その中に店名の海老屋の「海老」が描かれている。「分銅海老」・「花分銅海老」が海老屋醤油の商標となっている。



石川家に伝わり大切にされている書画

今回展示した4点は、石川家で表装・額装し、大切に保管されている資料の一部である。明治から昭和初期にかけ、成田町の発展に尽くした石川正英・愛一郎(九代目・十代目石川甚兵衛)や初代石川虎之助(八代目石川甚兵衛の長男)の時代、海老屋旅館には様々な著名人と交流があったと伝えられているという。



船越衛書簡

1881(明治14)年明治天皇の三里塚行幸に際し、当時千葉県令であった船越衛が、新勝寺より東伏見宮、伏見宮へ献上の氷に添えられたと思われる書簡の草稿か。

東伏見宮・伏見宮は、明治14年の明治天皇の成田市域行幸に供奉され、6月30日は三里塚の種畜場、競馬場などを廻られており、書簡はこの時のものか。



絹の袱紗の寄せ書き

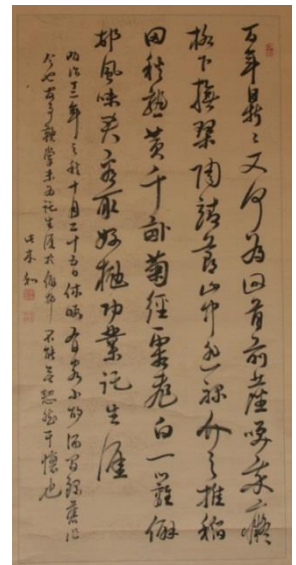
(原口 照輪・柳田 正斎・神山 魚貫など11名)

奥原 晴湖の日本画

(幕末から明治期の女流画家の席書と伝えられている)



柴原 和の書(初代千葉県令)



※今回の展示にあたり、石川隆氏・石丸智氏・三枝浩氏・成田山霊光館・(株)海老屋より、資料の提供・ご協力をいただきました。
※なお、今回の展示で使用した資料の一部は、9月から「ドライブイン海老屋」(本町335番地)でも展示を行います。